

155

796

眞
の
教

第
壹
編

020164-000-0

特16-330

眞の教

一乗院 独卑庵 / 著

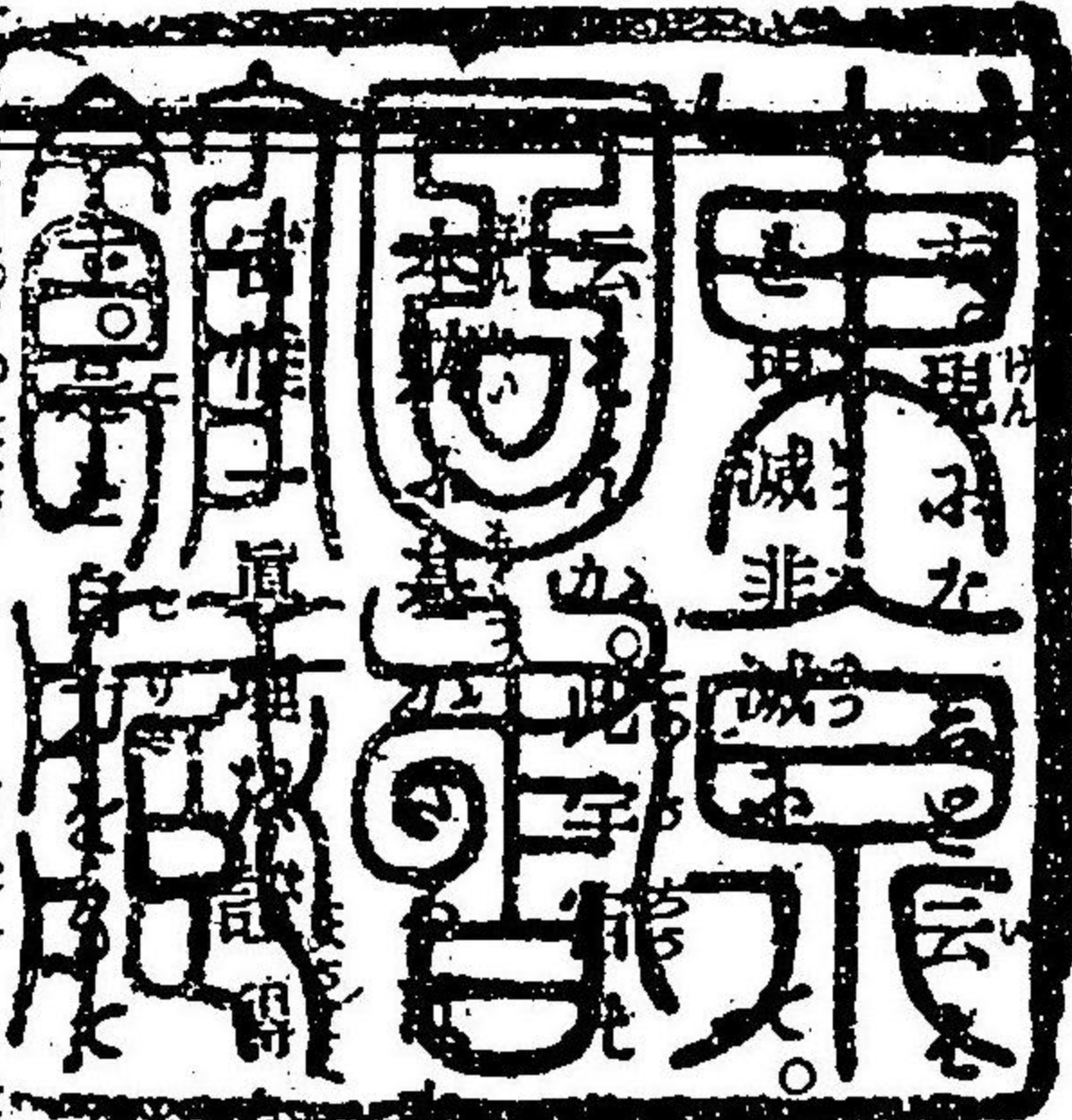
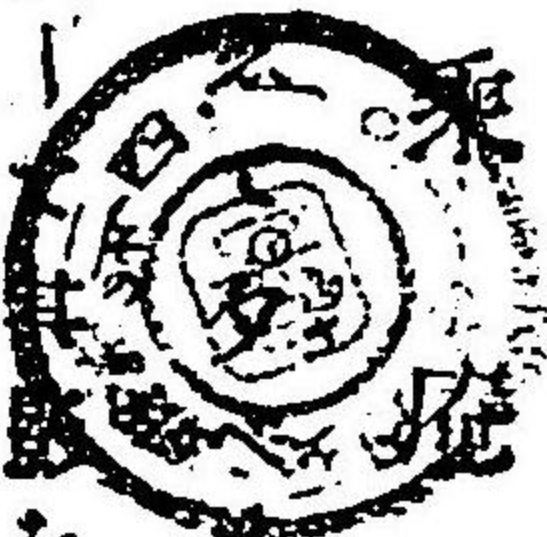
M24.10

ABH-0379



眞の教

宇宙惟一眞理の本跡は。猶一天太陽の如し。朝たに現
際限あるなし。現にありと云はんとすれば。西山に没し。其影を移さ



んことをば。東天に現れて。此の宇宙を照す。實は是
市住不變。あて汝わしませ。嗚呼妙と云はんか。奇と
高法。森羅の諸法。亦た一とて。此宇宙惟一眞理は
なり。實は其功用大なりと申べし。吾人の心は此字
吾人の身は此字。吾人の精神は此字。吾人の自力は
主觀的なる。吾人は精神力に由る。自力とは客觀的なる。此宇宙惟一眞
理の本跡に由る。是れなり。吾人は是れを標準となす。明鏡となす。自力
は是れ隔離をべきあり。俱に融即成なる。最大幸福を得るは

道なり。
 然るに。人或は云はん。斯る宇宙惟一眞理此本跡本主なる者也。我々肉眼以て之を見見る能はず。現に見る能はざる者。何故以て信ずるを得べきと。

なるは。現に見る能はざる者。以て。ありと信せしむるは。いかにも理なき様ふ思ふなれども。設ひ目を見へざるも。此とて。強ちになまど云ふべからず。喩へば。彼の向の山の上。煙り此立つ。以て見。其下。火のあるを知るを得べし。煙りを見て。火此なまとは云ふべからず。又我等當跡四支五官此作用せるをもて。心のあるを知るが如く。此宇宙惟一此本跡に於けるも。亦た斯此如也。我々肉眼此目に見へざれども。常此此宇宙此間にをわままりて。天となく。地となく。普遍圓滿まで。到らざる所なく。達せざる所なく。神通自在此力用。常に此世界に顯は

とて。晝夜の別ちなく。我等一切衆生を利益一玉ふといへども。悲ひ哉。迷ひ此凡夫にて之を見奉ること能はず。我跡にある眼耳鼻舌身此五官にせよ。手足此四支ふせよ。作用せる所は。是れ一心此力用なるも。其心を手ふどり。現見ること能はざるが如し。我等衆生無始より已來。迷ひみ迷を重ね。此宇宙惟一此本跡にてまままを。無始無終。三世常住此本佛。本主此常。此宇宙此間に。我々を知らざりき。幸ひなる哉。本佛本主此寶號たる。南無妙法蓮華經此御本尊にして。こゝろ。始めて知り。始めて信ず。我迷ひ此雲此はきて。己身此佛性此眞如此月を詠むることを得たりき。

斯く云は。又或は云はん。彼此耶蘇教此所謂造物主なる者也。殆んど類をることなきやと。否決して左にわらず。我云ふ所此宇宙惟一の本主と。耶蘇教の所謂造物主とは。天地雲泥も管ならず。大に異なれり。何

となれば彼の耶蘇教の立る所は萬物を造ると云ふ造物主を立てり。我云ふ所の宇宙惟一の本主は。萬物を造るとは云はず。而れども萬物を支配するの力用と有せる者なり。喩へば我一心を。四支五官を支配するの力用有ると異ならず。而れども一心が。四支五官を造るとは云はざるか如し。夫れ仰いで天象を觀るに。日月星辰は森羅羅列し。四季の運行をなして。時到り。節來り。天變にあらざる此間は。敢て違ふこと此なき。俯して地理を觀るに。山川草木は基布整頓。一織一芥。事々物々。一と云て理法具へ。相成顯して。盡く美成呈。妙成究めざるはなき。斯る不思議なる實相の此法界に顯はれ玉ひまは。其不思議の妙理なくして。争で此法界に顯はれ玉ふべき。不思議此妙理ありて。不思議此實相此法界に顯はる者ならん。實相の此法界も活動するを妙理の此法界に存せる故ぞかし。妙理實相二なれども。不二なるをば。惟一

眞理此本體と申せなれ。

例せば。我が眼の色を見。耳此聲を聞き。鼻の香成嗅く所。舌の味う所。身此觸る、所。一として我一心の作用ならざるはなかるべし。此宇宙間も亦復斯此如し。此世界は大天地ふして。我當體は小天地なるべし。大小異なれども圓融不二ならん。故に此宇宙法界に。惟一眞理の本體あわしませて。晝夜一時だもたむことなく。此世界に作用顯して。活動する所の妙相をば。無作此應身如來と申せ。其作用活動する所此妙理をば。無作の報身如來と稱せ。其妙相妙理不二一體なるをば。無作此法身如來と申せ。是れ三身如來あてましますも。惟一の本體あてましますも。所謂一身即三身。三身即一身あして。一體不二古今同體あてこりあわせらめ。過去にも滅せず。未來も生ぜず。無始無終。三世常住此本體あてあわし

まをなり。翠し此無作三身の本主本佛此寶鏡をば。南無妙法蓮華經と
 申し奉る。是れを我等一切衆生此模範とし。明鏡となして御本尊を崇
 め奉るなり。
 已る印度に在る。釋迦世尊も。此宇宙惟一の本跡の妙理をば。五十年
 の間種々に説法し玉ふ。中ふ法華經を説せ玉へし時だふも。唯た壽量
 論として。其功用功德の廣大無邊なる趣を説せ玉ふも。所謂功德
 分のみあして。未だ其功德の因分を。壽量品の文の底に秘して
 示させ玉は也。未法萬年の弘法として。發し置せ玉へり。故ふ釋迦世尊
 は。本果妙の教主にして。日蓮聖人は本因妙の教主なり。其行法。天地懸
 かに異れり。彼れは印度月氏國。此れは東洋日本國なり。
 然るに斯る大法も。時至らざる。世尊の滅後正像二千年の間。猶説示
 する能はず。又た是を顯そへき人もなかりき。彼の龍樹。天親。天台。傳

教等と内監冷然と申て。内ふを知しめし玉ひしかども。時機至らされ
 は言葉に出して述べ玉は也。然るも末法ふ入て今を去ること六百年
 の頃。日蓮聖人我日本國に出現し。此宇宙惟一の本生を我等一切衆生に
 知らしめ玉はんとして。寶鏡たる南無妙法蓮華經を寶顯し。其本跡本
 理なるをば示し玉へて。我等衆生の心念すへき明鏡となし。身に行
 ふべき標準とし玉はんが爲に。身を抛せ玉へて。遠流刀杖等の大小
 難に値はせ玉ふも。御身に忍ばせ玉へて。我等一切衆生に。醫者
 此良藥を病ある者此口に服せしむる如く。慈母の赤子の口に乳を含
 めしむると等しく。此宇宙惟一の本主此寶鏡たる。南無妙法蓮華經此御
 本尊を口ふ唱へしめんとして。一切衆生をわれみ救はせ玉ひき。然
 るに南無妙法蓮華經此御本尊は。文字にて書顯し奉るといへども。此
 宇宙此間あわしまを。惟一真理此本跡ふして。即ち無作三身の本佛

本主の寶號にてましますせはなり。三世十方の諸佛も此御本尊に由らせ玉へてこり。佛ふはならせ玉ふらん。故に經文に諸佛の寶藏。十方三世の諸佛の眼目。三世の諸の如來の出生する種なり等と説せ玉へき。さとは此本尊。三世十方の諸佛の御師。一切衆生成佛の模範なり。所詮此御本尊の外に。彌陀。觀音等の諸佛菩薩の偶像を並べざる。此御本尊の中にも。一切の諸佛菩薩一切の森羅萬法。悉く皆籠らせ玉へて。一として漏るゝことなく。住し玉へばなり。喻へば日本の二字の中あり。三府。四十縣の國々。及び人畜。財産等一も残さず。其内に攝さるゝことなく。大海の潮の水の一滴に。江河の諸水悉く納めすと云ふことなし。若し此御本尊の外に。色相の偶像を並ぶるを。却て諸佛菩薩の本意に反り。又道理にも相背かん。已に經文には形像舍利を安くべからずと説れしは是となり。されば此御本尊には三世諸佛の因行果徳。萬

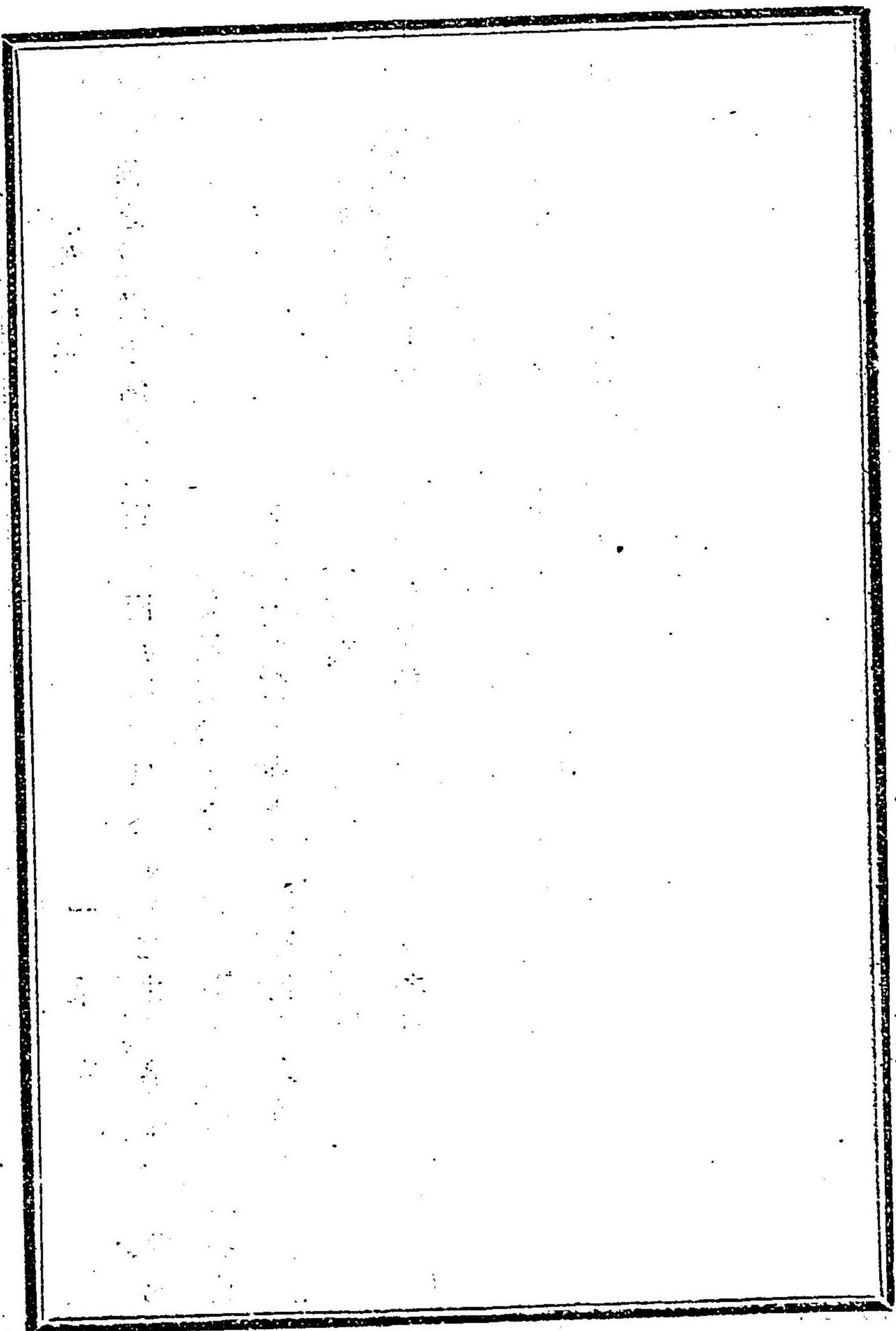
善萬行の諸波羅密の功徳を。悉く備へさせ玉へはなり。故に我等衆生薄地の凡夫にして。設ひ一文不通の者なれども。此御本尊の功徳力に由て知らず。釋迦世尊と異ならず。日蓮聖人と同體不二の佛果を成せること敢て疑ひなかるべし。小兒か乳を呑むに。其味を知らされども自然に身を養ふ。耆婆が妙藥誰れか辨ひて服をべき。鐵道蒸瀝の機械運轉の道理をは知らされども。是れに乗る時は。一瞬時間に千里の道を行きて。都會の花鳥風月を詠むることを得べし。今此一切萬法の備へ玉ひる御本尊に由るは。恰も鐵道蒸瀝に由るか如く。御本尊の南無妙法蓮華經を唱ひ奉る。信心の自力の手形にてこる。此土よりして寂光の都を感じし。諸佛菩薩と共に自受法樂をし奉ること。樂しども申計なし。但し是れ信心の厚薄によるべし。信心は手形なくして。寂光の都を見るふと難かるべし。返そくも信心を勵む

を要すべし。佛法に入るの根本は信心を以て本とせり。此信心の内うちに一切の修行しゆぎやうごころ悉く備へ玉ひはなり。妙樂日めうらく以信代しんをたてかひ惠と南無妙法蓮華經

廢偶像說

一乘庵

廢偶像之說。基干佛教之實說。而非私說也。余也爲之主說者。惟不過除綱紀廢滅。秩序紊亂。方今唯知有彌陀觀音等之諸佛菩薩。未知宇宙唯一真理之本主也。恰如彼奉多神教者耳。何不願之甚。蓋愛世之人。率先除害者多矣。維新之際。勤王之士。奉一天萬乘之天皇。廢二百有餘之列藩。當時人皆知有各藩諸侯。不知有天皇。綱紀擾々。秩序紊亂。廢之亦宜也。今廢偶像之說者。唯是憂慨佛教而已。當與廢藩之說併論焉。蓋余之所謂爲之主說者。在奉宇宙唯一真理之本主。以爲本尊。故經曰。不須復安形像舍利。天台曰。未必可安形像舍利。是非私說也。



明治廿四年十月十三日印刷
明治廿四年十月十五日出版

(施本)

愛知縣丹羽郡岩倉村六百五十五番戶
編輯者 關 戶 健

愛知縣丹羽郡岩倉村六百五十七番戶
印刷者兼 關 戶 政 次 郎
發行 者